

# 「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」

## “How to Integrate Muslims in Japanese Educational Settings : Learning from the Symposium”

大 形 里 美\*

Satomi OHGATA

スリ ブディ レスタリ\*\*

Sri Budi Lestari

クレシ サラ好美\*\*\*

Sarah Yoshimi QURESHI

### 要 旨

本稿は、日本の教育現場で滞日ムスリム（イスラム教徒）たちが直面している問題をテーマに2022年10月15日にオンライン形式で開催されたシンポジウム「日本の教育現場におけるムスリム対応のあり方を考えるー英米仏との比較から」における報告内容を踏まえ、そこから学ぶべき事柄を考察したものである。考察内容は（１）英米の教育現場におけるムスリム受け入れのあり方から日本社会が学ぶべきこと（大形里美）、（２）給食など、日本の教育現場で出される食べ物に関する問題について（スリ ブディ レスタリ）、（３）日本に暮らすムスリム第二世代ー周囲の大人に求められる対応ー（クレシ サラ好美）である。

---

\* おおがたさとみ、九州国際大学現代ビジネス学部、ohgata@cb.kiu.ac.jp

\*\* すりぶでいれすたり、立命館アジア太平洋大学講師、tari0828@apu.ac.jp

\*\*\* くれしさらよし、早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員、sarah@mehran.co.jp

**キーワード：**イスラーム（イスラム）、教育現場、滞日ムスリム、ムスリム  
第二世代、給食

## 1. はじめに

本稿は、2022年10月15日、九州国際大学地域連携センターの予算に基づき、北九州ムスリム・フレンドリー推進プロジェクト事務局を主催として、オンライン形式で開催されたシンポジウムの内容から学ぶべき事柄を考察するものである。日本の教育現場で滞日ムスリム（イスラム教徒）たちが直面している問題をテーマに開催された同シンポジウムの内容について、主催責任者であった大形と、シンポジウムの登壇者であった2名の研究者、スリ ブディ レスタリ氏とクレシ サラ好美氏の3人で、シンポジウムから学ぶべきこととしてここにまとめておく。

世界の宗教人口の中でムスリムの数は、現在キリスト教徒に次いで多いが、将来的にキリスト教徒を抜いて世界最大になると予測されており<sup>1</sup>、日本においても今後確実に増えることが予測されている。そこで北九州のような地方都市においても、イスラム文化に対する理解を深め、ムスリムたちのニーズに配慮した共生社会を構築していく必要がある。同企画は、日本社会、とりわけ学生たちや北九州市民に対して、日頃接する機会のほとんどないムスリムたちの文化や彼らが日本社会において直面している問題を理解してもらい、ムスリムの子どもたちにどのような配慮が求められているのか考えてもらうことを目的に開催された。教育現場においてムスリムの子どもたちの受け入れ環境を整えることは、非ムスリムの子どもたちにとっても異文化を理解し尊重する実践的学びの場が与えられることを意味し、日本社会全体にとって非常に重要な意味をもっている。

本稿は3章で構成され、第1章は、「英米における教育現場におけるムスリム受け入れのあり方から日本社会が学ぶべきこと」を、英米における教育現場

「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

の状況についての講演者の報告を基に大形がまとめた。続く第2章は、「給食など、日本の教育現場で出される食べ物に関する問題について」についてご自身の経験に基づく当日の報告や他の登壇者による報告等に基づきながらスリ プディ レスタリ氏にまとめていただいた。最後の第3章は、「日本に暮らすムスリム第二世代—周囲の大人に求められる対応」というタイトルで、シンポジウムでのムスリム第2世代の声や他の登壇者による報告、そしてご自身の当日の報告やこれまで蓄積されてこられた知見などに基づいてクレシ サラ好美氏にまとめていただいた。

## 2. 英米における教育現場におけるムスリム受け入れのあり方から日本社会が学ぶべきこと (大形里美)

シンポジウム第一部では英仏米におけるムスリムたちの経験を、当事者に語っていただいた。登壇者は、三人のお子さんをイギリスの学校に通わせた経験をおもちのインドネシア人ムスリム Aditya 氏、二人のお子さんをアメリカの学校に通わせた経験をおもちのインドネシア人ムスリム Rito Dwiputra 氏、そしてフランスの大学院で学んだ経験をおもちのモロッコ人ムスリムの Fahd Mouni 氏で、それぞれ英米仏での教育現場におけるムスリム受け入れのあり方について実体験に基づきながらお話いただいた。

以下、いくつかのポイントに分けて日本の教育現場が参考にすべき点を考察しておきたい。ここではイギリスとアメリカの義務教育レベルの学校におけるムスリム受け入れのあり方対応について報告者からの情報に基づきながら考察し、日本社会が学ぶべき事柄について考えてみたい。

### 2.1. 制服について

日本では一般に、ムスリムの子どもたち、とりわけ女子生徒については、スカーフを着用する子どもたちがいたり、スカーフは着用しなくても素足が見えないように、夏でも黒の厚手のタイツを履いたり、長袖の制服を着るよう保護

者から指導されている子どもたちもいる。

Aditya氏によれば、イギリスには制服はあるが、多文化主義の政策を取っているため、制服のスタイルをアレンジすることに全く問題はないとのことであった。

Rito氏は、2007年から2010年まで4年間、アメリカのテキサス州ヒューストンのフォース・ベנק・カウンティの小学校に3人の子どもたちを通わせた経験があるという。Rito氏の子どもたちが通っていた学校は、外国の文化、言語や宗教の側面の違いといった多様性の受け入れに積極的で、子どもたちの文化的多様性を学校がもつ豊かさとして捉えていたため、Rito氏の娘がスカーフを着用することに問題はなかったとのことである。二人の娘たちは幼い頃からスカーフを着用していたので、入学時にスカーフについて学校側に説明したという。ムスリムの子どもたちは他にもいたけれどもスカーフを着用している子どもは多くなかったため、ヒジャーブとは何か、なぜ着用するのかを学校側に説明して納得してもらい、体育の時にも着用を許されていたという。

#### 〈考察〉

日本の学校についても、スカーフが禁止されているところはないようである。しかし、スカーフを着用しているという理由で吹奏楽部の大会に出場させてもらえなかった事例なども複数報告されており<sup>2</sup>、問題が全くないというわけではない。また多くの学校で制服が定められており、スカート丈の長さなどがよく問題になる。イスラム教義では、素肌を見せないことが教えられているため、ロング丈のスカートが好まれるが、スカート丈の短い制服も多く、スカート丈を床数センチまでの長さにアレンジすることなどは一般的に認められていないからだ。そして水着に関しても、スクール水着は露出度が高いため、長袖、長ズボンの水着の着用が許可されていない学校では、ムスリムの女子生徒たちは保健室で休んだり、プールサイドで見学したりすることを余儀なくされているようである。そうした経験については、筆者自身が、複数のムスリムの知り合いから耳にしているところである。多文化主義政策をとるイギリ

「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

スや異文化を積極的に尊重するアメリカの学校における事例から、日本の多くの学校は、ムスリムの子どもたちが部活動や体育の授業で不自由を感じることがないよう、今よりも異文化を尊重し、服装についての規則について考慮すべき余地があると考えられる。

## 2.2. 給食について

Aditya氏によれば、イギリスの学校には給食制度はなく、学校には生徒たちが好きなメニューを注文して食べられる食堂があるとのことであった。食堂で注文する際に、「ハラールの肉をリクエストできますか?」と質問することで、ハラール肉について需要があることに気づいてもらえると思うので、そのように意識的に尋ねるようにしているとのことであった。そして最近、3番目の子どもの学校の食堂で、ハラールとは書かれてはいなかったが、ハラールの肉を使用したメニューがあることを知り、ハラールと書いて欲しいと食堂側にリクエストしたというエピソードが紹介された。

### 〈考察〉

日本の多くの学校においては給食制度があり、豚肉や豚由来の原材料が使用されている場合には、親がお弁当を持たせるムスリムの家庭が少なくない。家庭によって対応はまちまちで、鶏肉、牛肉についてもイスラム式に処理された肉でなければ子どもに食べさせない方針の家庭もある。そうした場合、同じメニューでなければいじめの対象になってしまうという心配から、給食の献立に合わせて、同じメニューのお弁当を準備することが多く、保護者の負担は小さくない。実際、カレーしか作れないパキスタン人のお母さんがカレーを子どもに持たせたところ、「臭い」「日本人が食べるものを食べられないなら国へ帰れ」といった言葉を浴びせられたという経験をムスリムの知人から筆者は聞いている。同じでなければいじめの対象としてしまうような子どもたちの意識を変えるための多文化共生教育が初等教育の現場で行われることは急務であろう。

アレルギーであれば、給食で除去食の対応をしてもらえるが、宗教上のタブ

ーについては対応してもらえないのが現状である。アレルギーは免疫機能によって体に異常な反応を起こすこととされるが、ムスリムが豚を食べないのは、体に異常をきたすからでなく、宗教教義で「禁忌」とされているからであり、食べられない状況があることは共通している。残念ながら、宗教上のタブーを軽んじていることに由来する対応であると言わざるを得ない。これは個々の学校における対応の問題というより、国の政策を変えていかなければ解決しない問題と思われる。

### 2.3. 礼拝について

Aditya氏によれば、イギリスでは礼拝については、マルチフェイス（あらゆる信仰）のための場所が用意されており、そこを礼拝に使用できるという。

イスラム教徒の男性は、金曜日にモスク（イスラム寺院／マスジドともいう）に集まって集団礼拝（金曜礼拝と呼ばれる）を行うが、金曜礼拝については、Aditya氏の子どもさんが通っていたウェストミンスター大学のカリキュラムを使用した新しい大学では200名のうち50名がムスリムで、金曜礼拝の前に行われる説教には、学長や他の教員たちも聞きに来るほど注目されていたとのことである。

Rito氏によれば、アメリカの学校の全てが文化の多様性に寛容であるわけではないが、偶然、子どもたちを通わせていた学校が、文化の多様性を学校の売りにしていたため、宗教的なニーズに合わせて融通を利かせてくれていたとのことであった。融通を利かせてもらった具体例として、金曜礼拝の時に親が子どもたち（男の子）を迎えてモスクに出かけることが許されていたというエピソードが紹介された。入学後、最初の1－2週目は何も言わなかったが、3－4週目に金曜礼拝に子どもを連れて行きたいという希望を学校側に伝え、許可を得たとのことである。そして毎週金曜の昼には子どもたちを迎えて食事を取り、モスクで礼拝を済ませた後、再び学校に送り届けていたという。

### 〈考察〉

日本でもムスリムの子どもたちが多い地域では、Rito氏の子どもが通っていた学校で行われているような対応をとっているところもあるようである。九州大学が伊都キャンパスに移転する前は、ムスリムの子どもたちが多く通う福岡市内のある小学校では、金曜礼拝のときに両親が子どもたちを車で迎え、一緒にマスジドに行ってお礼拝をし、礼拝後、再び学校に送り届けていたと留学生たちが語っていた。

こうした対応はかなり特殊であるが、空き教室などを礼拝用の場所として準備している学校は日本にも少なくないようである。ただし、周囲の子どもたちと違うことをしたくない子どもたちや、礼拝に熱心ではない家庭の子どもたちもいる。そのため、本人からの要求がないにもかかわらず、礼拝の時間には別の教室で礼拝をするようにと他の子どもたちの前で伝えたりすることは控えるなどの配慮が必須である。

## 2.4. 断食について

イスラム教には、一年のうち1ヶ月間、夜明け前から日没まで飲食を断つ断食の教えがある。病人や妊婦、そして思春期を迎えていない幼い子どもなどには断食の義務はない。しかし、断食の義務のない子どもであっても、小学校の中学年くらいから半日くらい断食の練習を始めることが多い。学校で断食を行う際にどのようにしていたのか話していただいた。

Rito氏は、お弁当を持たせて、もし体調が悪そうであれば、食べるように勧めることに躊躇しないで欲しいと伝えていたという。Aditya氏は、子どもが小学校1年生の時から断食をさせていたので、事前に学校側に説明したという。他にもムスリムの子どもたちはいたが、断食をさせていなかったのも、断食の義務について説明し学校側に理解を求めたとのことである。学校側は脱水症状になることなどを心配していたが、もしどうしても体調管理にケアが必要と見える時には両親に電話連絡をして断食を中断する許可を得るという約束の下

に、断食を許可してもらっていたという。

#### 〈考察〉

日本においても、断食について学校の責任者側から理解を得ることが、子どもを学校に通わせているムスリムの保護者たちにとって重要事項となっている。脱水症状になることを心配する学校の責任者から、断食はさせないと言われたから1ヶ月学校を休むことを考えているといった相談を筆者自身が受けたことがある。断食の必要性について学校に説明するには、かなりの日本語能力が求められるため、日本語が話せない保護者にとってはハードルが高い。ムスリムの子どもたちを受け入れる時のマニュアルのようなものを全ての学校の関係者たちが共有することが望ましいのではないだろうか。

### 2.5. イスラムの祝日について

イスラム教には、1年に2回大きな祝日がある。断食明けの祝日（イドゥル・フィトリ）と犠牲祭（イドゥル・アドハ）である。両日には、朝から家族で近くのモスクに出かけ、モスク前の広場で集団礼拝を行う習慣がある。そしてモスクから自宅に帰ってからは、家族、親族、近隣の人たちなどで集まりを開き、お祝いの会食を楽しむのがムスリム諸国での慣わしだ。日本では、小さなモスクが多いため、大きなホールがある公共の施設を借用したり、公園の広場を借用したりして集団礼拝を行うことが多いようである。

Rito氏によれば、彼が子どもたちを通わせていたアメリカの学校では、イスラムの祝日の際には、礼拝の時間は学校を休む許可を得て、集団礼拝に参加していたとのことである。ただし、礼拝を終えたら学校に戻らなければならなかったとのことであった。

#### 〈考察〉

ムスリムの国では、日本でお正月やお盆にお休みを取るのと同様、イスラムの大祭の日は国民の祝日となっているが、日本では祝日ではないため、ムスリムたちは家族にとってもっとも重要な宗教行事に参加するために、学校を休む



「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

と無断欠席扱いにされてしまうことが悩みの種となっている。キリスト教の祝日としてはクリスマスがあるが、クリスマスは、全ての子どもたちにとって休暇になっている。イスラム教の祝日についても、ムスリムの子どもについては、重要な宗教行事に参加するために授業を欠席した場合には公欠として認めるなどの配慮をして然るべきであると考えられる。

## 2.6. 異文化理解のための努力

Aditya氏によれば、イギリスでは、学校から宗教施設を見学する機会が設けられているという。例えば、年に一度「オープンモスク」を行うために政府が予算をつけるとのことである。またRito氏によれば、同氏が子どもたちを通わせていたアメリカの学校では、子どもたちが文化的多様性を受け入れることができるようにするための特別な授業が設けられていたという。毎年、生徒たちは、それぞれ自分たちの宗教や文化について紹介する機会を与えられ、自宅で発表準備をするため、両親たちも子どもたちがどのような発表をするのかを把握できたとのことである。ある年は、それぞれの宗教の有名人について、どのような人物で、何をした人だったかなどを発表し、またある年は宗教的な慣習について発表したという。Rito氏の子どもは断食の慣習について取り上げ、断食とは何か、どのような目的で行うのか、そして断食の時には飲食を断つ他、悪いことを言わないなど、断食月をどのように過ごすのかについて発表したとのことであった。

生徒たちは、肌の色、英語の方言、服装、食習慣などが違っているので、白人も含めて毎週入れ替わりで生徒たちが発表することで、子どもたちの目を開かせ、子どもたちが他の生徒たちの宗教や文化を尊重する姿勢をもつようになったと語ってくだった。

### 〈考察〉

日本の学校には、イギリスで行われているような宗教施設を見学するための機会がほとんど設けられていない。宗教的な文化について学ぶ機会として、修

学旅行などでお寺を見学し、座禅を組む体験をさせることがあるが、ムスリムたちの中には、この行事を宗教的な行為として捉え、子どもたちが仏像の前に座らされ、木の棒で叩かれることは受け入れ難く、参加させたくないという者も少なくない。クリスマス会などについてもムスリムの保護者の中にはクリスマス会はキリスト教徒の宗教的行事であるとして避ける者もいる。もっとも、日本におけるクリスマスパーティーは宗教色がなく、単なる交流会とみなして、参加させているというムスリムの保護者もいる。

今後は、日本に現在113あるモスク<sup>3</sup>などに見学に行く機会を学校が積極的に設けたりすることが重要な取り組みになるとと思われる。日本の地方自治体などにもイギリスのように宗教施設の訪問のために予算をつけていくなどの政策が求められているのではないだろうか。

またアメリカの学校での取り組みとして紹介されたような異文化理解のための教育は、小学生から異文化に対して寛容な姿勢を身につけるために大変重要だと考えられる。日本の場合は、ほとんどの地域において、子どもたちの文化的背景は多様ではないが、何らかの形で異文化理解のための時間を設けていくことが求められている。イギリスの行政による宗教施設見学に関する政策やアメリカの学校において設けられていたような異文化理解のための授業の試みは日本ではまだ見られないもので、日本は今後積極的に見倣っていくべきだと考えられる。

### 3. 給食など、日本の教育現場で出される食べ物に関する問題について（スリ プディ レスタリ）

筆者はムスリムであり、日本在住歴が20年近くあり、現在子ども二人を日本の小学校に通わせている。本章では、筆者の子どもが通っていた保育園や幼稚園、また現在通っている小学校における給食などをめぐる体験に基づいて、ムスリムの子どもたちに必要と思われる対応について述べる。また筆者自身の経験に加えて、筆者が以前日本語指導の講師として勤めていた小学校での事

「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

例、シンポジウム当日の登壇者の一人川口エニ氏の体験とも比較しながら事例を考察する。

まず、事例提示や問題提起をする前に、ムスリムの多様性について述べておきたい。ムスリムについて議論する際には、ムスリムの間に、出身国や地域の文化的・歴史的背景の違いがあることはもちろん、個々人の考え方にも違いがあることを認識し、それを尊重し、一般化しないことが重要である。食事に関しては、食べる肉、食品に含まれるアルコールについても、全員が同じ考え方を持っているとは限らないからだ。筆者自身は、調理用のアルコール（みりん、料理酒、酒精）は基本的に加熱すればアルコールの成分が飛ぶため、日頃から使っており、また外食の際にも気にしない。それに加えて、イスラム式に処理されていない牛肉・鶏肉についても問題にしない。以下で述べる記述は、これらの点を念頭に理解して頂きたい。

### 3.1. 保育園での対応

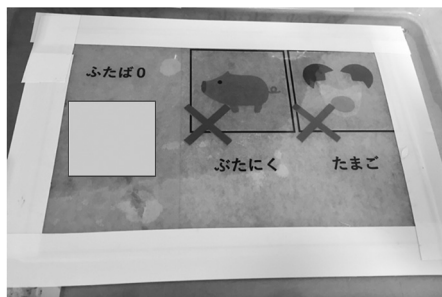
保育園では、ムスリムの子どもたちの食事制限について、地域、自治体、また保育園や子ども園を運営している会社によって様々な対応が取られているのが現状である。筆者は、居住歴の関係で、これまで東京都足立区、佐賀県佐賀市、大分県別府市の保育園を利用した経験がある。上述の理由から、筆者の場合は、基本的に豚のみを除く対応を求め、新しい保育園に子どもを入園させる度に、園長先生、栄養士、担任の先生と話し合い、豚肉を除いた献立が提供されるよう対応を求めた。この要望に対して、これまで通わせていた上記の地域の保育園は、十分な理解を示し、要望に応じて下さった。具体的には、豚肉の献立に替えて、鶏肉や牛肉などの代替食材を使った献立が用意され、さらに混乱やミスを避けるために様々な工夫がなされた。例えば、食べ物をのせるために使うトレイは他の子どもとは別の色や模様のもの（補足資料1）が用意されたり、園の通常のトレイにイラストなどを使ってわかりやすく「豚肉×」「豚エキス×」「ポークエキス×」などのラベルが貼られたりしていた（補足資料2）。

補足資料1 ムスリムの子ども用に用意されていた給食用トレイ



筆者が子どもを通わせていたS保育園2017年頃に使用されていたもの  
（出所）筆者撮影

補足資料2 給食用トレイに貼られていた豚由来の内容メニューを禁止するラベル



筆者が子どもを通わせていたS保育園で2017年頃に使用されていたもの  
（出所）筆者撮影

保育園は乳児または幼児を保育する施設であり、厚生労働省の管轄下にある。その関係であろうか、筆者が子どもを通わせていた保育園では、給食に関してアレルギーを持っている園児だけでなく、宗教上の理由でも除去食がある園児に対して柔軟に対応して下さっていた。昼食に限らず、午前と午後のおやつ、イベントに出る食べ物、例えば餅つき大会に定番の豚汁の時も代替のものを用意して下さっていた。時折、配膳ミスや手違いにより、豚肉を含む献立を誤って子どもが食べてしまうこともあったが、その際は迅速に連絡をしてくだ

さったので、その後の対応について慎重に考えていただくことをお願いした。そしてその後は、例えば複数のスタッフによってダブルチェックが行われるようになるなど、給食についての対応がより慎重に行われるようになった。

上記で述べた事例は筆者が子どもたちを通わせた保育園の事例である。保育園は規模が小さかったこともあり、比較的に柔軟に様々な背景を持つ園児のニーズに対して耳を傾け、独自の対策や対応をとることができたのではないかと考えている。しかし、このような事例は日本全国の全ての保育園やこども園に共通するものではないことも事実である。今回のシンポジウムの登壇者の一人であった川口エニ氏の体験談とインタビューから、同じ東京都でも自治体もしくは園を運営している会社によって対応が大きく異なっていたことが明らかとなった。

川口エニ氏が現在子どもを通わせている保育園における状況は以下のようであるという。

- ✓ アレルギーであれば対応はするが、宗教上の理由の場合は、保護者が代替のものを持参させるしかない。
- ✓ 献立表は全児童に配布されるものと同じものをもらって、どの献立（おかず）に豚肉、ハラールではない鶏肉や牛肉、またこれらに由来する加工食品が入っているかどうかについて、園側ではなく保護者自身がチェックを行い、それを確認のために園に提出し、確認済み（スタンプ入り）のものが後日保護者に渡される。この作業を経て、さらに毎日の送迎の際にも、明日おかずを持参するかどうか、どのおかずを持参するのかについて、口頭でのやり取りが行われる。
- ✓ エニ氏は、入園時に、代替のものを用意してくれないかと園側に要望を伝えたことがあるが、園はできないと回答した。また、ハラールの肉を提供するならそれを使って調理することが可能かどうか一度提案したが、それも難しいとの回答であった。
- ✓ おかずを持参する日、園の調理室で食事の前にそのおかずを温めてほしい

と要望を出したこともあるが、できないとの回答であった。

### 3.2. 幼稚園・小学校での対応

以下に述べる事例は、佐賀県佐賀市の事例及び大分県別府市の事例である。

#### 3.2.1. 給食について

##### (1) 佐賀県佐賀市の事例

日本の小学校においては、給食の提供が行われることが一般的である。筆者は入学前の入学説明会で、栄養士の先生に豚肉及び豚が含まれる加工品が食べられない旨を伝えた。

##### ● 入学前のコミュニケーション（ニーズと要望を伝える）

筆者の子どもが通っていた佐賀の小学校では、アレルギーではない場合、代替のものを学校側が用意できないと言われた。代わりのおかずを家から子どもに持参させることは許可されたが、子どもが朝持参して行っても、後から（給食時間の前に）筆者が持参しても、基本的に教職員室におかずが入っている弁当箱を預けなければならなかった。後述するように、これが原因でトラブルが起きた。

● 献立表のわかりにくさ。入学後の献立表の内容確認をめぐる事例・出来事  
上述したような川口エニ氏と同様、毎月全児童生徒に配布される献立表をもらっていた。けれども、漢字が読めて日本語に不自由がない人でも、一覧表を見てもどのおかずが豚肉及びそれに由来するものが使われているかよく分からない仕様になっている。以下の補足資料3はその一例である。

補足資料3 2018年当時のK小学校の献立表

20	ごはん 牛乳 ささみフライ ゆで野菜 どうぶのみそしる	ささみのフライ について	ささみ40 卵5	小麦粉3 パン粉5 油	キャベツ20 もやし20 チンゲンサイ10 にんじん5 小ねぎ3 たまねぎ20 小松菜5	塩 こしょう 中濃ソース5
23	チキンライス 野菜のコンソメスープ ヨーグルト	誕生給食 4月 うまれのお友だ ちを祝おう	鶏干し用3 みそ9 どうぶ30 わかめ0.5 鶏肉細切れ30 ベーコン5 ソーフル1こ	油	たまねぎ20 コーン10 にんじん5 たまねぎ20 セロリ3 こまつな20 7がが15	グチャップ22 塩 こしょう コンソメ1 塩 こしょう ココア4 袋

メニューと材料の関係がわかりづらい仕様になっている。例えば、23日（月曜日）の献立にどの料理にベーコンが入っているか非常に分かりづらい。

（出所）筆者撮影





なければならない状況になった。そして解決方法として学校側が提案したのは、毎月の月末ごろに栄養士、日本語指導の教員、筆者の3人で献立表の確認を行うことであった。以下の補足資料5はその確認作業を経たマーカーや赤ペン入りの当時の献立表である。

補足資料5 2019年当時のK小学校の献立表

日 (曜)	献立名	献立方の 説明	食 品 名			講師表	1人1 kcal	塩分 %	献立方の 写真・メニュー 写真	
			休をとくものこになる	エネルギーのこになる	体の調子を整えるものこになる					
OK	1 金	ごはん 牛乳 佐賀牛のサイコロステーキ めずめゆのい(にまのたけな みそしる 3色ゼリー)	リクエスト給食 「サイコロ」 ステーキの「にまのたけな れかけ」について	佐賀牛40 油揚げ2 米みそ煮み10 油揚げ2しほ3 わかめ5	エネルギー 3 ござ きつまいも10 3色ゼリー(乳脂なし)	ホレンソウ1 白根2もやし2 ごぼう5 だいこん20 ねぎ5 にんじん5のきだいたけ16	しょうゆ、みり2	688	28	
	4 月	ごはん 牛乳 鮎の塩焼き ナムル とろろのチゲあん	「ほごわかし い」献立について	鮎40(1切)	ごま1 味噌2 味噌0.7 にんじん5 もやし20 ゆず大根7 はくさい20 キヤベツ20 くら だいに15 にんじん5 ねぎ5 卵1個2	しょうゆ1.7 塩 しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	625	2.1		
	5 火	肉まん タンパクの ヨーグルト	もやしについて	豚まん20 白みそ4. 4 鶏がら10 (お肉1個)	ちゃんぽん麺50 油 ごま3 砂糖0.5 じゃがいも20 油	にんじん40 さやいんげん5 ごまよく30 きゅうり20 はくさい10 ほうりんせう20	しょうゆ0.5 5 しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	689	2.9	
OK	6 水	ごはん 牛乳 白飯のそくせき漬け さけのり	いんげんいので の巻物について	鶏もも肉20 うすらたまご15 生揚げ40 味噌10 竹輪10 はんぺん5 さけのり1袋	ごま1	しょうゆ0.5 5 しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	612	2.0	うすら餅	
	7 木	色揚げの牛乳 おひん 白飯と豚肉のスープ 3色みそ	リクエスト給食 「おひん」について	豚肉10 きゅうり10 かぼち10	油 上白湯、5 緑豆煮物 にんじん5 たまねぎ20 はくさい140 こまほな10 ピーマン10 もやし30 にんじん20 小豆飯40 こんにゃく 白飯20 味噌3 マヨネーズ ごま1	塩 コンソメ1 塩 こしょう しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	672	2.4		
	8 金	ごはん 牛乳 チキン南蛮 チキン南蛮「チキン南 蛮」について	日本料理のて い(にまのたけな みそしる 3色ゼリー)	鶏肉40 白飯20 味噌3 マヨネーズ ごまみそ 煮みそ5 牛肉20	じゃがいも50 油 砂糖2.4 しょうゆ1 2 ござ 海菜3分3切7粒	しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	664	2.8	マヨネーズ	
OK	11 月	ごはん 牛乳 にくじゃが きゅうりと白飯の即席煮 手作りおからのかげ	手作りおからのかげ について	塩豆腐1 しらすずし、きさめいの904 豚肉40 鶏1	しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	621	1.6		
	12 火	セルフカツサンド (トンカツ、キャベツ、 クリームソース、プリン)	3月生まれの お友達をお祝い について	豚肉10 牛乳 牛肉30 うすらたまご15 味噌ミックス1	セルフカツの巻物「セルフカツ」について にんじん5 たまねぎ20 ござみそ20 プッチンプリン1 プッチンプリン1 にんじん5 たまねぎ20 ござみそ20 キャベツ30 きゅうり20 フルーツミックス1 スライティ30 和風ドレッシング7	コンソメ1.2 2 ござ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	702	2.9	プリン餅	
	13 水	ごはん 牛乳 佐賀牛給食部長カレー うすらの煮物 味噌汁、フルーツミ ックス	図書館の給食 「給食部長」の カレーについて	牛肉30 うすらたまご15 味噌ミックス1	にんじん5 たまねぎ20 ござみそ20 キャベツ30 きゅうり20 フルーツミックス1 スライティ30 和風ドレッシング7	コンソメ1.2 2 ござ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	664	2.6	うすら餅 フルーツ餅	
OK	14 木	クロワッサン スウィートポテト にんじん、さやいんげん、 オムレツ、チーズ	卒業生みなで の祝いしめし について	ベーコン10 豚肉30 はすしす	にんじん20 ピーマン5 ぱせい1 たまねぎ20 えびきりしめし たまねぎ20 きゅうり5	キャベツ10 トマト10 コンソメ1.2 2 ござ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	725	2.0		
	15 金				ケーキ1					ケーキ餅
	18 月	(にんじん) 牛乳 シシリアンライス (焼肉・サラダ) みそしる アイスクリーム	「シシリアン ライス」について 知ろう	牛肉40 さき1.5 油 一食マヨネーズ1 煮干3生揚げ20のみそ1 アイスクリーム	りんご20 ぎょしん 5 にんじん0.2 レタス10 きゅうり10 たまねぎ5だいに40白根20ねぎ3 アイスクリーム	しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ しょうゆ、しょうゆ、しょうゆ	736	1.8	マヨネーズ アイスクリーム	

栄養士、日本語指導の教員、筆者の3人で確認作業を行った後の献立表。

(出所) 筆者撮影

こうした学校側の協力はありがたいものではあったが、毎月のチェック作業はお互いの負担になっていたのではないか、結局のところ献立表の書き方を変えてもらった方が労力が削減できたのではないか、というのが筆者の感想であった。

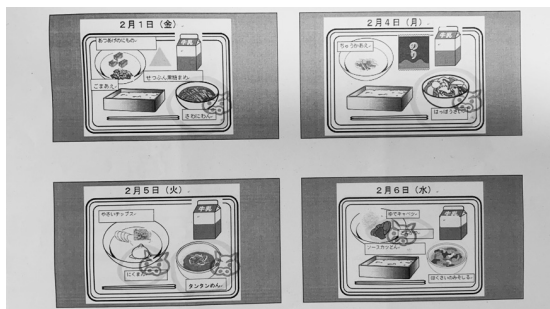


● 豚肉を誤って口にしてしまった事故とその後の対応

筆者の子どもが通っていた学校は、様々な学校の制限の中、献立表を一緒に確認したり、ハムが入っているサラダがある日に、日本語指導の教員が付き添って子どもに「これはハムだよ。抜きましょう」と教えてくれたりするなど色々工夫をしてくださっていた。けれども、豚肉を誤って口にしてしまうという事故も起きた。その日、筆者は学校におかずを持って行き職員室に預けていた。子どもがその日おかずを職員室に取りに行くことを忘れており、担任の先生もその日の給食のメニューに豚肉のおかずがあることを把握していなかったことが原因であった。

筆者の子どもがいた佐賀市の小学校のクラスでは様々な出来事が起こり、その都度行われたコミュニケーションを経て担任の教員が取べき（取る必要がある）対応として、何ができるかが少しずつ明確になり、具体的な対応策の形ができた。そして誤って豚肉を口にしてしまう事故を未然に防止するための対応策として、担任と子ども・保護者だけでなく、クラス児童全員への情報共有が重要であることがわかり、以後教室に下記のような献立表が壁に貼られるようになった（補足資料6）。

## 補足資料6 教室の壁に貼られるようになったK小学校の2019年ごろの献立表



豚肉を使用したメニューにはマーカーで印がつけられ、クラス児童全員への情報共有が行われた。

(出所) 筆者撮影

## (2) 大分県別府市のS小学校・幼稚園

筆者は2019年3月に大分県別府市に転居した。新学期が始まる前には、教頭先生や栄養士と話し合いを行い、給食に関する要望を伝えた。そしてその要望に対して基本的に佐賀市の学校と同じ対応であればできると言われた。しかし、話し合いのプロセスの中では、学校側から、「豚肉の料理が出る日だけ代わりのおかずを持ってくると混乱が生じる可能性があるので、給食を利用しないですべてお弁当にしたらどうか」という提案も出された。その提案に対して筆者側は、「その案は他と違う子どもを排除しようとするものではないか」と学校側に主張し、断った。

そして、筆者が、筆者の子どもが何が口にできない、何が大丈夫かを細かく説明し、話し合った結果、学校側が「アレルギー材料一覧表」を献立表と合わせて毎月渡してくださるようになった。スクールハンバーグや揚げ春巻きなどの(給食室で調理されていない)調理済みのものを使用する際には、「豚肉」の場合はアレルギーとしての表示義務がないため<sup>4</sup>、原材料が書かれていなかった。この場合、栄養士の先生が、マーカーや赤ペンで「豚」と書いてくださっていた。2023年5月より、アレルギー表示の欄に「他」が加えられ、豚が入っ



た。以下の写真を参照されたい。黄緑色のマークがあるのは豚肉がある日を示している（補足資料8）。

補足資料8 大分県別府市のS幼稚園の献立表

月	火	水	木	金
1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20

豚肉がある日には黄緑色のマークがつけられていた。

（出所）筆者撮影

### 3.2.2. 放課後児童クラブ（学童）のおやつ

佐賀市と別府市の学童においては、おやつが提供される。両市では似たようなケースがあったことを述べておきたい。学童には栄養士が不在であり、市で雇用されている支援員が子どもの見守りや学習などの支援をしている。筆者が子どもを通わせていた両市の放課後児童クラブの支援員の中には、十分な知識を持っていない人もおり、筆者は豚やそのエキスが入っているかどうかどのようにわかるかと聞かれ驚いたことがある。豚という漢字にしか注目しないようで、「ポーク」が豚であることを知らなかった支援員もいた。そのため、学校と同様、学童においてもコミュニケーションを重ねる必要があった。

「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

### 3.3. 日本の教育現場における課題と提案

#### 3.3.1. 献立表や原材料の表示

筆者は献立表に関しては、まだまだ改善すべき点があると考えている。日本の教育現場には、それぞれ様々な事情、仕組みがあるであろうが、アレルギーをもつ児童のための配慮にも通用するので、以上で述べた事例を通じて、献立表については分かりやすさが非常に重要であると主張したい。

筆者が日本語指導の講師として勤めていた学校では、豚肉、鶏肉、牛肉が食べられないムスリム児童のために、以下のような特別な献立表を作っていた(図9)。その学校では、ムスリム児童にもできるだけ学校給食を食べてもらいたいとの思いからこのような対応をしていたと考えられる。

補足資料9 ムスリム児童のための献立表

へいせい30ねん5がつ きゅうしょく (school lunch)について		
※わからないことがありましたら、 しょうがつころの までごねんらくください(TEL )		
日 曜	こんだてめい	5の1 さん
1	むぎごはん きゅうにゅう とりのからあげ ※とりにくchickenがはいっています さっぱりサラダ ごもくみそしる	→おうちからかわりのものをもってきてください
火	ミルクパン きゅうにゅう 2 さけのムニエル コーンサラダ チャウダー ※とりにくchickenがはいっています ごもくみそしる	→ (ハムをいれなくて構いません) →おうちからかわりのものをもってきてください
水	ごはん きゅうにゅう 7 やきにく ※きゅうにくbeefがはいっています うおそうめんしる ミニトマト	→おうちからかわりのものをもってきてください
月	8 かやくごはん きゅうにゅう きびなこのからあげ じゃがいものみそしる ごくとろピーズ	
火	9 ミルクパン きゅうにゅう タンタンめん ※ふたにくporkがはいっています わしきようざ ※ふたにくporkがはいっています ナムル	→おうちからかわりのものをもってきてください →おうちからかわりのものをもってきてください
水	10 ごはん きゅうにゅう おやこに ※とりにくchickenがはいっています わしきのすのもの	→おうちからかわりのものをもってきてください
11	ココアあげパン きゅうにゅう コロコロサラダ ポークピーズ ※ふたにくporkがはいっています アセロラゼリー	→おうちからかわりのものをもってきてください
金	14 むぎごはん きゅうにゅう デンヘイりすふた ちゅうかスープ	→ (ふたにくporkをいれなくて構いません)
月		

筆者が日本語指導の講師として勤めていたH小学校の2018年頃の献立表である。

(出所) 筆者撮影

### 3.3.2. 柔軟な対応と情報共有

給食室については、おかずを温めるとか、サラダからハムを抜くなど特別な対応をしてもらえないことがムスリムの保護者として残念に感じ、課題と考えていることである。また、クラス、担任教員のレベルでの理解と情報共有はできていても、学校全体ではそれがなかなかできないという印象があることについても今後の課題と考えている。

宗教に対する考え方についても教員によって理解が異なるのが現状である。筆者の次男は現在小学校2年生になり、担任の教員から、「クラスのお友達に〇〇くんが、豚肉が食べられないことを伝えましょうか。社会勉強にもなると思いますし」と言われた。宗教などによる食の規律について、是非このような対応を、学校教育の一環として、担任の教員だけでなく、クラスの児童全員に、さらには学校の関係者全体に共有していただけたらと願っている。

## 4. 日本に暮らすムスリム第二世代—周囲の大人に求められる対応—（クレシ サラ好美）

### 4.1. 本発表の背景

日本のムスリムに関する研究において、ムスリム第二世代〔以下、「第二世代」〕への言及が見られるのは2000年代に入ってからである。就学年齢に達する第二世代の増加を見据えて、給食や一部の授業で特別な対応が必要になるといった提言がなされ〔杉本 2002；丸山 2007〕、実際に第一世代を対象とした調査でも同様の不安を挙げる声が多く聞かれた〔店田・岡井 2010〕。研究者もムスリム家庭の親も、同じ視点で学校制度上の問題に焦点を当てていたことがわかる。だが、当時まだ幼かった第二世代当事者の声はこれらの論考や調査に反映されていない。

かれら第二世代が成長した今、ようやく当事者の語りを通して、実際の学校現場における実態が明らかにされつつある。本発表は、その研究成果のひとつである拙稿〔クレシ 2022〕から第二世代が経験する困難事例を拾い出し、そう



した困難の解消あるいは軽減のために周囲の大人たちに何ができるかを考察したものである。

#### 4.2. 同化願望

第二世代の97%以上が外国にルーツを持つ子どもである<sup>5</sup>。肌の色や顔立ちに関するからかいは早ければ幼稚園くらいに始まり、それが無視や言葉によるいじめ、身体的な攻撃に発展することがある。そうした不快な経験を外見的な差異によるものとする第二世代は、小学生・中学生期には、「整形して目を小さくしたい」とか、「美白クリームで肌を白くしたい」といった外見的な同化への願望を抱く。

かれらは学校給食の場面でも、級友らとの差異を意識する。豚肉をはじめ禁忌とされる食材を避けるため、給食に代えて家から持参した弁当を食べることが恥ずかしかったと語る第二世代は非常に多い。弁当の中身やにおいをからかわれたという経験はほとんどの第二世代に共通するが、中には弁当箱に豚肉を入れられるといった悪質ないたづらを受けた者もいる。

特に女子は、家庭によって厳しい制限が課されることがあり、さらに周囲との差異を意識しやすい。服装規定については、調査事例の中ではスカーフ着用にとだわる家庭は少なかったが<sup>6</sup>、腕や脚の露出を避けるため制服のスカート丈を長くしたり体操着や水着の着用を制限する家庭は多かった。また、親の出身地域の習慣をそのまま適用して、登校以外の外出を禁止する家庭もある。小学生・中学生期に放課後友達と遊べなかったり、高校生・大学生期に極端に早い門限を課されたり、また部活動や学校行事後の打ち上げ、修学旅行や謝恩会に参加を許されなかったりという語りは女子に集中する。男女共学に馴染みのない親は、小学生・中学生期の同級生との会話にすら神経質になる。授業参観の際に男子と話しているところを目撃して怒る父や、毎晩食卓でその日男子と話していないかどうか確認する父についての語りも女子特有のものである。

幼い頃から外見的な差異に劣等感を抱いてきた第二世代にとって、級友らが

普通にしていることが許されず、逆に周りの誰もやっていないことを強要される経験は、さらに自身をマイノリティとして強く意識する要因となる。かれらは周囲と異なる自身の境遇を恨めしく思い、同化願望を募らせていく。

#### 4.3. 葛藤する第二世代

イスラームを自称する過激な集団が起こす事件の影響も見逃せない。事件に絡んだからかいを受けるのは無論のこと、中には「テロリスト」や「イスラム国」というあだ名で呼ばれる第二世代もいる。イスラームと過激な集団との混同は教室内で解消されることが望ましいが、教員もまたイスラームに否定的なイメージを持っている場合、それは難しい。例えば、名古屋市のある高校で、銃を持つ覆面男性とペンを持つ白人男性が並んだ風刺画を教材に「WHO HAS DAMAGED MUHAMMAD MORE?（ムハンマドを傷つけたかのは誰か?）」を討論させる授業が行われたとき〔読売新聞2015〕、同校に在籍する3人の第二世代への影響は斟酌されていなかった。調査事例の中にも、ムハンマドと自爆テロを関連付けた風刺画が試験に出題されたときの戸惑いや、試験の解答に「イスラム国」と書くことへの抵抗感、時事問題を扱う教室内で上がる揶揄の声を正さない教員に失望して不登校になった者の語りがあふ。これらの教室内で、ムスリム生徒が図らずもその汚名をすべて背負ってしまうことに、教員は気付かない。

そもそも過激な集団に属するムスリムは世界のムスリム人口の0.01%にも満たないのだが<sup>7</sup>、そうした事実を知る教員はどれだけいるのだろうか。名古屋市内の大学で行ったアンケートには、高校の時事問題で出題された「事件を起こしたのは何教徒であるか」という問いがきっかけでムスリムが危険だと思うようになったという回答があった。誤ったイスラーム観が教室内で正されるどころか、教員の偏見が生徒に伝播する場合さえあることがわかる。

こうした偏見に晒され不快な経験を重ねた第二世代の中には、進学や転居などで新しい環境に置かれた機会に、自身のルーツを隠蔽する者がいる。ある者



「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

は親の出身国からイスラームを連想されないよう、自身をアメリカ人やブラジル人と偽り、ある者は豚肉を食べないことでムスリムだと悟られないよう、あえて級友らの前で禁忌を破る。だがその一方で、かれらは親の期待を裏切ってはいけなく考える。学校ではムスリムであることを隠し禁忌を破る者も、家庭では礼拝をし断食をして精一杯良きムスリムとしてふるまおうとする。しかし「親に愛されたい／親を悲しませたくない」という欲求を満たすために無理して行うイスラーム実践は、「みんなと同じでいたい／仲間外れになりたくない」という欲求を満たす隠蔽の努力とは相容れない。

学校と家庭で正反対の自分を演じ分けているうちに、かれらは青年期特有の「自分とは何者か」という問いに答えを見つけれなくなってしまう。相反する欲求の狭間で続く葛藤が招く心理的危機状況はときに深刻であり、過剰な危機への不適応から登校拒否や非行に走る者、神経症やうつを発症する者は実は少なくない。それほどに苦しい状況を回避するため、葛藤の一方を捨てる選択を決断する者もいる。かれらは周囲への同化願望を優先して、親の期待に応えることを諦めムスリムとして生きることをやめてしまう。だがムスリムマジョリティの環境で育ってきた親には、その決断に至るまでの子の懊悩が理解され難い。結果的に子は家庭内で孤立し、親子関係は悪化していく。

だが一方で、そうした決断をせずとも心理的危機状況を脱することができた第二世代もいる。そのきっかけを調査事例の中で探っていくと、かれらの周囲にはその葛藤を理解しあるいは共感し合う者がいたことに気付かされる。結論を先取りするなら、日本でマイノリティとして暮らす第二世代には、理解者・共感者が必要だということである。では、かれらが葛藤を乗り越えて健全に成長するために、周囲の大人にできることは何だろう。

#### 4.4. 周囲の大人に求められる対応

まず学校現場において、教員に期待されることは何か。複数のムスリム生徒を受け入れている愛知県内の公立中学校と私立高校で行った教員への聞き取り

からは、ムスリム生徒が教室内で居心地の悪い思いをしないようにとの配慮が意識的になされている様子がうかがえた。前者は地域の障害者施設や特別支援学校との交流を長く続けており、後者は性同一性障害の生徒や介助犬を連れた生徒の受け入れ経験を持ち、そうした背景が多様性を自然に受け入れようとする姿勢とマイノリティを排除しない気遣いにつながったと考えられる。特筆すべきは、ステレオタイプのムスリム観が危険であるという意見が両校の教員の語りに共通していたことである。例えばハラールひとつをとっても、豚肉さえ食べなければいいという者、牛肉や鶏肉もイスラーム式屠畜にこだわる者、ゼラチンや乳化剤まで気にする者とさまざまであり、また学校内での礼拝や断食、服装規定や特定の授業や行事への参加の制限も各家庭によって考え方は異なる。すべてのムスリム生徒がスカーフ着用の許可や礼拝スペースの提供などを望んでいるわけではないし、たとえ親が厳しい対応を求めているも、生徒本人は同化願望ゆえにそれを拒む場合もある。さらにはムスリムであることを隠したい生徒にとって、特別な対応はむしろ避けたいものである。「ムスリムの子だけじゃなくて全員違う」という教員の語りが示すように、ムスリムに限らず個々の生徒の違いに目を向け受け入れる姿勢こそ、学校現場における理想的なあり方といえるだろう。

次に家庭において、親は子とどう向き合うべきか。外国にルーツを持つムスリム生徒として学校生活を送った経験のない親にとって、学校と家庭の二重生活に疲弊したわが子の懊悩を理解することは難しく、良きムスリムであれとの願いから、つい過大なイスラームの実践を子に課しがちである。それが親の期待に応えようとする子の負担を大きくし、同化願望との葛藤を深めていることに気付ける親はどれほどいるのだろう。調査事例の中には、ムスリムとして生きることをやめる選択をしたことを罵り続ける親を嘆きながらも「イスラーム抜きで認めてほしい」という第二世代の語りがあふ。他方で別の第二世代は、ムスリムとして生きることに関心を感じていた時期、「精神的にもおかしくならなかったのは母の無償の愛が大きかった」と語っている。孤立し懊悩する第

「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

二世代が求めているのは、イスラームへの向き合い方がどうあれ、無条件に子を受け入れ寄り添う理解者であることを、親は知るべきだろう。

最後にムスリムコミュニティには、第二世代の居場所づくりを提言したい。名古屋のムスリムコミュニティでは、第二世代が定期的に集まるための居場所SYM (Space for Young Muslimsの略称)を確保してきた。学校にも家庭にも理解者を得られずマイノリティとしての孤独を抱え葛藤に苦しむ第二世代にとって、SYMで出会う同じ境遇の同世代ムスリムは経験を分かち合える大事な仲間である。これまでたった一人で抱えてきた葛藤を仲間と共に乗り越えることで、ムスリムとして生きることを肯定的に捉えられるようになる[名古屋モスク 2020など]。現在国内には100を超えるモスクがあり、建物としてのモスクにこだわらなければさらに多くのムスリムコミュニティがある。それら各地のコミュニティが第二世代に交流の場を提供し見守っていくならば、かれらはもっと容易に心理的危機状況を脱することができるようになるだろう。

#### 4.5. 小括

第二世代の多くがまだ就学年齢に達する以前、学校制度上の問題に焦点を当てた議論がムスリム家庭の親や研究者によって行われていた。現在も学校における環境整備について論じる際、ハラール給食や礼拝用スペース、スカーフ着用といった宗教実践に関する便宜が話題に上りがちなのは、その名残だろう。だがそれらはむしろ、そうした宗教実践を我が子に遵守させたい親の思いが先行したものであり、第二世代が実際の学校生活で経験する困難は別にある。

それは本稿で言及したいいくつかの事例であり、そこに端を発する同化願望はかれらの葛藤を深め、ときに「自分とは何者か」という問いに答えを見出せず、アイデンティティ危機に陥る場合もある。第二世代当事者の語りに耳を傾けるなら、かれらにとって真に必要なのは宗教実践に関する便宜ではなく、かれらを理解し共感しようとする視点である。

上述のSYMに集まる第二世代が発信する動画サイトの中で、日本人はムス

リムにどう対応すべきかという質問を受けて、「対応するってよりは知ってくれたらそれでいい」と答える場面がある〔SYM 2020〕。これまでもかれらは、自分たちを特別扱いされるべき存在としてでなく、他の日本人生徒・学生と同じ「普通の」存在として、自分たちを知ってほしいと繰り返していた〔名古屋モスク 2015など〕。誤解や偏見の中で学校生活を送るかれらが「普通の」存在として周囲に受け入れられるために、そしてかれらが葛藤を乗り越えて健全に成長するために、教員や親、ムスリムコミュニティに集う大人たちがそれぞれに第二世代をサポートしていくことが期待される。

## 5. おわりに（大形里美）

今回のシンポジウムは、日本の教育現場においてどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきかを考えることを目的に開催した。日本は世界的にも稀な均質的な社会であることもあり、とりわけ画一的な日本の義務教育レベルの教育現場においては、同化圧力が強い傾向がある。そして、その中で平均的な日本人とは異なる食文化・服装コードなどをもつ子どもたちは、さまざまな不自由を強いられている。本稿が、そうしたムスリムの子どもたちやその保護者らが直面している問題について理解を深めるための一助となれば幸いである。

近年、テロに関する報道によって生み出されたイスラム教に対する偏見も見受けられ、学校関係者による配慮や、教育現場において生徒たちがグローバル時代においては「違っていることが当たり前」とであると認識し、異文化を尊重できる姿勢を子どもたちがもてるようになるための指導がこれまで以上に求められている。同シンポジウムで紹介されていたアメリカの学校で実践されている異文化理解のための授業の実践例や、イギリスで行われているような、政府が予算をつけて学校から宗教施設を見学するオープンマスジドのような機会を設ける試みは、今後日本においても取り入れていくべきものではないだろうか。

「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

ムスリムの食習慣や服装コードは個人や家庭によって異なり、多様であるため、ステレオタイプな対応はできない。そうしたことも含めて、どのようにムスリムの子どもたちを教育現場で受け入れていけばよいのかに関するガイドラインのようなものを作成することが求められている<sup>8</sup>。

## 謝 辞

同シンポジウムは、在日インドネシア共和国大使館と日本インドネシアムスリム協会から後援を受け、九州国際大学地域連携センター、一般社団法人北九州ムスリム会、アジアに生きる会・ふくおかを連携団体として開催したもので、開会に際しては、日本インドネシアムスリム協会会長で東京大学准教授の Muhammad Aziz 教授にご挨拶いただき、閉会に際しては、トゥマンハティふくおかの代表理事弥栄睦子氏、一般社団法人北九州ムスリム会の代表理事 Muhammad Subkhan 氏にご挨拶をいただいた。またシンポジウムの講演者・報告者として、Aditya Pradana 氏、Fahd Moumuni 氏、Rito Dwiputra 氏、中村玲和氏、川口エニ氏、中村ローズ氏、スリ プディ レスタリ氏、Dr.Indriyani Rahman 氏、クレシ サラ好美氏、井上幸雄氏にご登壇いただいた。同シンポジウムの開催にご協力いただいた皆様方に、この場をお借りして改めて深く感謝の意を表したい。

## 【注】

- 1 Pew Research Center の予測によれば、現在の傾向が続けば、2070年にはムスリム人口がキリスト教徒の人口を上回るとされている。  
<https://www.pewresearch.org/religion/2015/04/02/religious-projections-2010-2050/>
- 2 ムスリム・フレンドリー・ジャパン、「ムスリムの子どもたちを保育園・幼稚園・小中高校で受け入れる際の注意点」(<https://muslim-friendly-jp.com/jp/qa/EvWQUgtf>) p.10を参照。
- 3 2023年5月6日付の朝日新聞Digital「日本人のイスラム教徒」が増える理由 国内のモスクは20年で7倍」によれば、2021年3月時点でのモスクの数は、113カ所とされているが、筆者が確認しているところで、2022年3月に北九州モスク、2023年6月に長崎モスク

クなども新たに建設されている。

- 4 現在、表示の対象となるアレルゲンである特定原材料等は28品目あり、えび、かに、くるみ、小麦、そば、卵、乳、落花生（ピーナッツ）、アーモンド、あわび、いか、いくら、オレンジ、カシューナッツ、キウイフルーツ、牛肉、ごま、さけ、さば、大豆、鶏肉、バナナ、豚肉、まつたけ、もも、やまいも、りんご、ゼラチンが挙げられているが、豚肉については、表示義務はなく、推奨表示とされている。

消費者庁、「食物アレルギー表示に関する情報」

[https://www.caa.go.jp/policies/policy/food\\_labeling/food\\_sanitation/allergy/assets/food\\_labeling\\_cms204\\_210514\\_01.pdf](https://www.caa.go.jp/policies/policy/food_labeling/food_sanitation/allergy/assets/food_labeling_cms204_210514_01.pdf)参照。

- 5 店田（2018）によれば2016年末現在、夫婦の一方または双方が外国人のムスリム家庭は1万9千世帯、同論文で言及された日本人家庭の数字から、夫婦双方が日本人のムスリム家庭は250～500世帯と類推できる。
- 6 「クレシ（2022）」で発言を取り上げた女性13名のうち、調査の時点でスカーフを着用していたのは3名である。
- 7 例えば、事件当時のISの戦闘員は3万人前後で「Daveed（2015）」、世界のムスリム人口18億人「Pew Research Center（2017）」のわずか0.0017%に過ぎない。
- 8 ムスリム・フレンドリー・ジャパンのウェブサイトに掲載されている「ムスリムの子どもたちを保育園・幼稚園・小中高校で受け入れる際の注意点」はそうした試みである。  
<https://muslim-friendly-jp.com/jp/qa/EvWQUGtf>参照。

## 【参考文献】

- クレシ サラ好美（2022）「日本に暮らすムスリム第二世代 ―学校教育現場における実態の検証」『白山人類学』24、pp.131-154.
- 杉本均（2002）「イスラーム教徒における社会文化空間と教育問題」宮島喬・加納弘勝編『変容する日本社会と文化・国際社会2』東京大学出版会、pp.145-167.
- 店田廣文・岡井宏文（2010）『滞日ムスリムの子ども教育に関する調査報告書』早稲田人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文（2018）「日本人ムスリムとは誰のことか ―日本におけるイスラーム教徒（ムスリム）人口の現在」『社会学年誌』59、pp.109-128.
- 丸山英樹（2007）「滞日ムスリムの教育に関する予備的考察」『国立教育政策研究所紀要』136、pp.165-174.

## 【新聞雑誌】

読売新聞「世界情勢英語で考える 国際教育プログラム導入」2015年1月14日.

「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか：シンポジウムから学ぶ」  
(大形里美・スリ プディ レスタリ・クレシ サラ好美)

## 【ウェブサイト】

朝日新聞Digital (2023年 5 月 6 日付け)、「日本人のイスラム教徒」が増える理由 国内のモスクは20年で7 倍」、

<https://www.asahi.com/articles/ASR4X5215R2GPTIL002.html> (閲覧日：2023年 7 月20日)

消費者庁、「食物アレルギー表示に関する情報」、

[https://www.caa.go.jp/policies/policy/food\\_labeling/food\\_sanitation/allergy/assets/food\\_labeling\\_cms204\\_210514\\_01.pdf](https://www.caa.go.jp/policies/policy/food_labeling/food_sanitation/allergy/assets/food_labeling_cms204_210514_01.pdf) (閲覧日：2023年 7 月15日)

名古屋モスク、「2015 モスク見学の高校生との交流(3)～愛知県公立高等学校」、

<https://nagoyamosque.com/5487.html> (閲覧日：2023年 7 月 1 日)

名古屋モスク、「2020 モスク見学の大学生との交流(4)～慶應義塾大学、愛知県立大学、名古屋外国語大学」、

<https://nagoyamosque.com/13158.html> (閲覧日：2023年 7 月 1 日)

ムスリム・フレンドリー・ジャパン、「ムスリムの子どもたちを保育園・幼稚園・小中高校で受け入れる際の注意点」

<https://muslim-friendly-jp.com/jp/qa/EvWQUgtf> (閲覧日：2023年 7 月20日)

ヤングむすりむチャンネル、SYM 2020、

<https://www.youtube.com/watch?v=USjGKZMe5yE&t=155s> (閲覧日：2023年 7 月 1 日)

Daveed Gartenstein-Ross (February 9, 2015) "How Many Fighters Does The Islamic State Really Have?"

<https://warontherocks.com/2015/02/how-many-fighters-does-the-islamic-state-really-have/>  
(閲覧日：2023年 7 月 1 日)

Pew Research Center 2017 "The Changing Global Religious Landscape".

<https://www.pewresearch.org/religion/2017/04/05/the-changing-global-religious-landscape/>  
(閲覧日：2023年 7 月 1 日)

Pew Research Center 2015 "The Future of World Religions: Population Growth Projections, 2010-2050".

<https://www.pewresearch.org/religion/2015/04/02/religious-projections-2010-2050/> (閲覧日 2023年 7 月20日)



持続可能な共生社会を目指して滞日ムスリムたちの受け入れ方を考えるシンポジウム

日本の教育現場におけるムスリム対応のあり方を考える  
—英仏米との比較から—



連携団体：九州国際大学地域連携センター / 一般社団法人北九州ムスリム会  
名義後援申請：在日インドネシア大使館 / 日本インドネシアムスリム協会  
トゥマン・ハティふくおか / アジアに生きる会・ふくおか

参加費無料  
要事前申込み

日時：2022年10月15日（土）午後14:30—18:00 JST

Zoom 開催

14:30-14:50 JST 開会 & 挨拶 Prof. Yusli Wardiatno（インドネシア共和国大使館 教育文化担当官）  
Prof. Muhammad Aziz（日本インドネシアムスリム協会会長、東京大学准教授）

14:50-15:45 JST

I 英仏米におけるムスリムたちの経験

Aditya Pradana氏（英国での経験）、Fahd Moumni氏（仏国での経験）  
Rito Dwiputra氏（米国での経験）+ 質疑応答



15:45-16:25

II 滞日ムスリムたちの経験

川口エニー氏、中村玲和氏、中村ローズ氏 + 質疑応答

16:35-17:50

III シンポジウム「日本の教育現場においてムスリムの子供たちに必要な対応とは？」

Dr.Sri Budi Lestari 氏（立命館アジア太平洋大学講師）  
Dr.Indriyani Rahman 氏（北九州市立大学研究員）  
サラ・クレシ好美氏（早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員）  
井上幸雄氏（アジアに生きる会・ふくおか会員、福岡市教育委員会日本語指導員）  
+ 全体討論



-18:00 閉会 & 挨拶 Dr.Mukhamad Subkhan（一般社団法人北九州ムスリム会 代表理事）  
弥栄 睦子氏（トゥマン・ハティふくおか 代表理事）



要事前申込み・先着80名様  
申し込みは右のQRコードからお願いします。



主催：北九州ムスリム・フレンドリー推進プロジェクト事務局  
（責任者：九州国際大学 大形）  
お問い合わせ先：070-8421-1726